

最後の人¹⁾

今後はだれにも、自分や子供たちの将来を
予め知ろうとはさせまい。

ミルトン『失樂園』10巻770-2

メアリ・シェリー 作
森 道子 訳

第一巻

序

わたしがナポリを訪れたのは1818年のことだった。その年の12月8日、友人とわたしはナポリ湾を渡って、バイイの海岸に散らばっている古代の遺跡を訪ねた。静かな海の、透明できらきら輝く水が、海草のからんだ古代ローマのヴィラ跡を洗い、色とりどりに変化する日光を浴びてダイヤモンドのように煌めいていた。青く澄んだ水面は、水の精ガラテアが真珠貝の車を走らせたであろう、クレオパトラがナイル川よりはるかに好んで妖しいまでに美しい船を浮かべたであろう、と想わせるものであった。冬だったが、早春と呼ぶにふさわしい風情が大気に漲り、快い暖かさのせいで、訪れる旅行者は皆、喜びに満ち足りて、バイイの静穏な湾や燦然と輝く岬に去りがたい思いを抱いていた。

わたしたちは世に聞こえたエリュシオンとアヴェルヌス湖を訪れ、神殿や浴場や由緒ある名所の遺跡を散策し、やがて、クマエの女子言者シビラ²⁾の暗い洞窟の中に入った。わたしたちの従者が掲げる燃えるたいまつは、暗い地下の通路で赤く、いや、ほの暗く輝いていた。地下通路を貪るように取り囲む闇は濃く、少しでも光の要素を持つものは

吸い込んでしまおうと伺っていた。自然にできたアーチ道を通り過ぎると、次の地下道が現れたので、そこにも入っていかどうか尋ねた。ガイドたちは通路を覆う水に映るたいまつを指さして、わたしたちの判断次第だと言ってから、シビラの洞穴に通ずる道なので惜しいけど、とつけ足した。この言葉に好奇心と熱意を刺激され、ぜひともその通路に入らずにはいられない気になった。こんな冒険の遂行によくあることだが、困難は思ったほどではなく、水浸しの狭い道の両側に、「足の裏ぶんだけの陸地」があった。やがて荒廃して暗く広い洞窟にたどり着くと、従者がこれこそシビラの洞穴だと告げた。わたしたちはひどくがっかりした。――が、もしやのっぺりとしてごつごつの岩壁に、天界の訪問者の痕跡が残っていないかと、注意深く探索した。片側に小さな入り口があったので、どこに続いているの、入ってもいいの、と聞くと「これはだめ」とたいまつを持った野蛮な感じの男が答えた。「ほんの少しなら行ってもいいが、入る者はいないよ」

「それじゃあ、ぼくが試してみよう」とわたしの友人は言った。「本物の洞窟に続いているのかもしれない。ぼく独りで行こうか、それとも、きみもついてくる？」

わたしが行くつもりだと合図すると、ガイドたちはこぞって反対した。わたしたちの慣れないナポリ土着の方言で、幽霊が出るとか、天井が落ちるとか、狭すぎて入れないとか、水のたまった深い穴があって溺れるぞとか、べらべらまくしたてた。友人は、その男からたいまつを取り上げて、熱弁を遮り、わたしたちだけで中に入った。

最初二人がやっと通れた通路は、みるみる狭く低くなり、わたしたちは体をほとんど二つに折り曲げて歩いたが、引き返そうとは思わなかった。ついに、やや広い場所に出て、低かった天井も高くなった。この変化に大喜びしていると、たいまつが気流で消され、あたりは真っ暗闇になってしまった。ガイドたちには明りを点け直す道具があったが、わたしたちには何一つなく、もときた道をとって返すほかなかった。広くなった空間を手探りで入り口を探し、しばらくすると、どうやら見つけた、と思った。しかし、それは明らかに上り坂になった第二の通路と判明した。行き着いた先は前の通路と同様であったが、その空間には、どこからとも知れず、光線のようなものがおぼつかない薄明を投げかけていた。わたしたちの眼が徐々にこの薄暗さに慣れてくると、それより先には直進する通路のないこと、洞窟の一隅から屋根の上の低いアーチに昇ることができ、そこにずっと歩き易い道のあることに気付いた。しかも、この光はそこから差し込んでいることも発見したのだ。かなり苦勞しながら、上によじ登ると、もっと明るい別の道に出、そこからは、さっきと同様、また上り坂になっていた。

何度かこれの繰り返しにでくわし、そのつど登ることに決めて、やがて、天井がアーチ形のドーム状になった広い洞窟にたどり着いた。天井の真ん中に穴が開いていて、そこから天上の光が入ってきていたが、伸び放題の茨や藪が、ヴェールのように陽光を妨

げていたため、その部屋は厳かな宗教的な色合いを帯びていた。広々としていて、ほぼ円形で、片端には、ギリシア風寝椅子くらいの石のベンチが突き出していた。命あるものがいたという唯一の形跡は雪のように真っ白な山羊の骸骨であった。この山羊は上の丘で草を食みながら、たぶん穴に気付かず、真っ逆さまに落ちたらしい。その災難から長い年月がたち、落下跡は何百年ものあいだに、生い茂る植物に修復されていた。

洞窟の中味にあったのはそれ以外に、木の葉の堆積や樹皮の断片に、白い薄膜様の物質であり、それは、まだ熟さないとうもろこしの粒を包む、莢の内側の緑色の部分に似ていた。ここに到達するまでの奮闘に疲れ果てて、岩の寝椅子に崩れ込んでいると、羊の首についた鈴のチリンチリンと鳴る音と羊飼いの少年の叫び声が頭上から聞こえて来た。

やがて、わたしの友は、あたりに散らばった木の葉を少し拾い上げると、「これこそシビラの洞窟だ、これこそシビラの葉っぱだ」と叫んだ。よく見ると、木の葉にも樹皮にも例の物質にも文字が書き込んであった。もっと驚いたのは、さまざまな言語で書かれていたことである。中には、わたしの友人も知らない、古代カルデア語や、ピラミッドと同じくらい古いエジプト象形文字もあった。さらに奇妙なことに、英語やイタリア語などの近代言語もあった。微かな光で、少し判読したところ、それが予言、つい最近起きた事件の詳細な経緯、今日有名な近代人の名前などを含んでいるようであった。歓喜と悲嘆、勝利と敗北の詠嘆がその薄くて貧弱な紙面に書かれていた。まさにこれはシビラの洞窟であったが、ウェルギリウスの描写どおりではなかった。しかし、地震と火山の噴火によってこの地方全体に激震が襲ったことのあるのを考えると、変化も当然予測できることだった。廃墟跡は時の経過によってあとかたもなく消えていたけれども。木の葉が保存されたのは、洞窟の口を塞いだ偶然の事故と、その唯一の開口部に嵐さえ通さなかった植物の繁茂のお蔭であった。わたしたちは大急ぎで、少なくとも友人が判読できる木の葉を選び出すと、その宝を担いで、薄暗く天井のない洞窟に別れを告げた。相当苦労したあげく、やっとガイドたちに合流できた。

ナポリ滞在中、何度も、時にはわたしたちだけで、陽光まばゆい海面を滑って、この洞穴に戻り、その度に宝を増やした。その時以来ずっと、わたしは、この世ののっぴきならない事情に邪魔されたり、気分がそのような研究に向かないとき以外は、その神聖なる遺物の判読に専念してきた。雄弁で驚異的な、その意味内容はわたしの骨折りに酬いてくれることが多く、広大な自然と人間の精神とを通して、悲しみに沈むわたしを慰めてくれるときもあれば、わたしの想像力を大胆に天駆けらせてくれるときもあった。暫くのあいだは、二人でこの仕事に従事した。しかし、その期間は去り、労苦を分かち合った、えり抜きで類いまれな友の死とともに、労苦の酬いもまた消え去ってしまった――。

やさしい始まりとはあまりに異なる結果を
あなたにお見せしたいと思う。何という厳しい運命に
わたしたちは妬まれたことか、ああ、わが気高き宝よ！³⁾

わたしは、わずかのシビラの文書に見出した最近の発見を世間に公表した。散乱して
いて、支離滅裂なので、つなぎ合わせて、首尾一貫した形に作り上げねばならなかった
が、主旨は、寄せ集めた詩の断片に含まれた真理と、クマエの乙女の天与の靈感に基づ
いていた。

彼女の詩のテーマと、ラテン詩人にイギリスの衣装を着せることに、疑問を抱くこと
が度々あった。また、不明瞭で混乱しているため、現在の形は判読者であるわたしの手
による改作なのだと思うこともあった。それはまるで、聖ペトロ大聖堂にあるラファエル
作「主の変容」の写しをばらばらにした断片を、別の画家に与えるようなものである。
彼は破片を集めて、ある形にまとめ上げるが、それはその画家に特有の精神と才能によ
って創り上げられたものになる。クマエのシビラの木の葉文書はわたしの手にかかって、
興味も美点も歪められ、損なわれたに違いない。このように変えたことに対して言い訳
ができるとすれば、元のままではとうてい解読不可能ということだけである。

わたしの仕事は延々と続く孤独な時間を励ましてくれ、かつては慈愛に満ちていた顔
を背けてしまった世界から、想像と力で輝く世界へわたしを移してくれた。悲惨と有為
転変の物語から、どうして慰めなど得ることができたのか、と訝る読者もあろう。それ
は、われわれ人間の本性の神秘であって、わたしはその完璧な支配下にあり、その影響
から逃れることはできないのだ。白状すると、物語の展開に心をかき乱されたり、忠実
に資料を転写しながら、ある記述には落ち込むどころか、呻吟したことさえある。しか
し、人間の本性のお蔭で、精神の興奮はわたしにとって貴重なものとなり、嵐や地震ば
かりか、もっと恐ろしい、激烈で破壊的な人間の情熱をも描く想像力は、虚構の悲哀と
後悔を理想化してみせて、わたしの現実の悲しみや尽きぬ後悔を和らげてくれた。理想
化するとは苦痛から致命的打撃を取り除くことにほかならないから。

このような弁明など必要ないのかも知れない。というのは、わたしの改作とも翻訳と
も言うべきものそれ自体が、脆く薄いシビラの木の葉に形状と中味を与えようとわたし
が費した時間と微力の意義を裁決してくれるはずだから。

最後の人

『最後の人』

第一章

わたしは海に囲まれた僻地、雲の影に覆われた国の出身である。果てしのない大洋と人跡未踏の大陸をもった地球の表面の全貌を考えると、無限の中の取るに足りない一粒のように思える所である。しかし、心理の秤にかけると、面積が広く、人口の多い国々よりも、はるかに重いのだ。実に、人間の精神のみが人間にとってよいものや偉大なものを創造するのであり、自然の女神すら召使いの筆頭にすぎない。濁った海の極北に位置するイングランドは、風を支配し、波間を蹴立てて走る大勢の人の乗った巨大な船という姿で、わたしの夢に現れる。少年時代のわたしにとってイングランドは宇宙だった。故郷の丘に立って、わたしの視界いっぱい広がる野原や山に同胞の住居が点々とし、彼らの労働によって肥沃になっているのを見ると、この地こそ地球の中心と確信し、地球の他の国々は作り話に思え、想像力や理解力の助けを借りなくとも容易に忘れることができた。

最初から、わたしの運命は、有為転変の猛威にさらされるさまざまな人生行路の見本であった。わたしという個人はほとんど遺伝の産物であった。父は自然から、人も羨む、あり余るほどの機知と想像力を授けられた末、それらの風に吹かれるままに、理性という舵も判断力という航海の水先案内も付けてもらわずに、人生の小舟を出帆させた類いの男だった。素性は卑しかったが、早くから世間の注目するところとなり、贅沢な社交界の華麗な場で活躍するうちに、わずかばかりの父方の財産を使い果たしてしまった。思慮分別のない短い青年時代に、当時の遊蕩児貴族たちに崇拜され、さらに、若き君主からも熱愛された。王は、権謀術数の政治と王者としての激務を逃れ、尽きぬ愉楽と憂さ晴らしを父との交友に見出していた。父は自分の衝動をコントロールしたためしかなかったもので、絶えず苦境に陥り、そこから脱出するにはただ持ち前の器用さだけが頼りだった。面目上も取引上も負債は山積していて、他人なら打ちひしがれるところを、屈託なく、飽くまで陽気で、無頓着だった。それに、富裕な貴顕たちの宴会や会合には、なくてはならない存在だったので、欠点もたちまち見逃され、有頂天になった父は甘い考えを抱いてしまった。

この種の人気は、どの場合でも、束の間に消え失せるものだ。彼が切り抜けねばならない各種の難儀は、持ち合わせの財産と反比例して恐るべき比率で増大した。そのようなとき、彼に夢中の王が救ってくれ、親切に譴責してくれるのが常であった。父は改心を真底誓うのだが、生来の社交性といつもの美食癖、それと何より、彼にとりついてい

最後の人

たギャンブル鬼のために、せっかくのよい決心ははかなくも消え、約束はかりそめとなった。やがて性分の鋭い勘で、高貴な身分の人々への影響力が衰えて行くのを察した。国王は結婚し、イングランド王妃として社交界の女主人となった、傲慢なオーストリア王女は、厳しい目で父の欠点を、また、軽蔑の目で父への夫君の愛情を見た。父は自分の失脚の日の近いのを感じたが、嵐の前の静けさを利用して自らの救命策を講ずるところか、不実で冷酷な運命の審判者である歓楽の神に、前にも増していけにえを捧げることによって、迫り来る災いを忘れようとした。

優れた気質を持ちながら、他人に影響されやすい王は、今や進んで専制的な配偶者の言いなりになってしまっていた。彼は父の軽率と愚行にはなほだしく不快を示すようになり、ついには嫌悪の情をあらわにするようになった。しかし、その暗雲も父が姿を見せると消散してしまうのは確かだった。心温かい率直さや才気縦横の会話や信頼しきった態度などは実に魅力的であった。彼が感化力を失うのは、彼のいないところで、彼の過誤の話が繰り返し王の耳に入るときだけだった。王妃はあの手この手を用いて巧みにこの不在のときを延ばし、非難を集めうるだけかき集めた。ついに、王は彼を絶えまない騷擾の根源と見なすようになった。父との交友という束の間の快樂のために、退屈なお説教と父の不謹慎のあげつらい(聞くに耐えないけれど、反証もできなかった)を我慢しなければならなかったからだ。その結果、もう一度だけ彼を更生させてみよう、もし失敗したら永遠に追放だ、と王は心に決めた。

その光景はきわめて興味深い、ひどく感情の高ぶったものであったに違いない。これまで柔和と善良で聞こえた権勢並びなき王が、今、高遠な訓戒を垂れ、とがめたりすかしたりして、まともな仕事に精を出し、早晚相手にされなくなる歓楽をきっぱりと避け、価値のある分野にエネルギーを費やすよう、父に嘆願した。その場合、君主である自分が彼の支えとも支柱とも開拓者ともなろうと。父はこの親切が身にしみた。一瞬目前に、野心に満ちた夢が浮かび、目前の娯楽をより立派な務めと取り換えてもよいと思った。誠実に熱意をもって、求められるままに誓約した。王は変わらぬ寵愛のしるしとして、緊急に返済を要する借金を払い、幸先よく新職につくために、相当額の金を与えた。まさにその夜、まだ感謝とよい決心でいっばいのまま、父はこの全額とさらにその倍額をギャンブルのテーブル上に失った。最初の損を取り返そうと、倍額を賭けて、全く支払い不可能な面目上の借金を作ってしまった。もはや王に会わず顔もなく、彼はロンドンとその偽りの歓喜とまといつく悲惨とに背を向け、赤貧のみを道連れに、孤独のうちに、カンバーランドの山々と湖沼に引きこもった。彼の機知、名言、数々の個人的魅力、うっとりする挙手挙動、社交的才能などは長く人の心に残り、繰り返し口から口に上った。この社交界の寵児、貴族たちの友、優雅で放埒な世界に異質な輝きを添えた光は、今いづこかと尋ねる者があれば、逼塞の身の彼は行方不明だとの答えが返ってくるであろう。

だれも彼がまともな務めで歓楽の償いをすると、目を見張るような機知の伺候が引退後の年金に値するなどとは思ってもいない。王は彼の不在を悲しみ、好んで彼の名文句を復唱し、共有した冒険を語り、才能を称えたが、——そのくらいで追想は終わってしまった。

一方、父は忘れられても、忘れることはできなかった。空気や食物よりも必要なもの——歓楽の興奮、貴族たちの賛美、高貴な人々の贅沢で洗練された生活などの喪失をかこった。そのため、神経性の熱病にかかってしまい、その間、宿を借りていた貧しい農家の娘の看護を受けた。彼女は愛らしく優しく、何より彼に親切だった。高貴な生まれの美女たちのアイドルだった者が、落ちぶれても、生まれの卑しい田舎娘には、気高くすばらしい別世界の人に見えたのも驚くにあたらない。二人の間に芽生えた愛情が、不運な結婚を生み、その間にできた子供がわたしなのだ。

母がどんなに思いやりがあり優しくても、彼女の夫はいつまでも落魄の身を嘆き続けていた。勤労に慣れていないので、増加する家族をどうやって養っていいやら見当もつかなかった。王に頼んでみようと考えたこともあったが、自尊心と羞恥心とに引き留められ、なんらかの行動を起こさねばならないほど困窮する前に、あえなく死んでしまった。その大惨禍の前の短い小休止のような期間に、父は将来を予見し、妻子が置かれるみじめな状況を苦慮した。最後に渾身の努力を払って王宛に手紙を書いた。苦境を雄弁に語る感動的な手紙で、彼の本質をなす縦横の才気がここかしこにひらめいていた。彼亡き後の妻子を王の友情に委ね、これで、妻子の生活が自分の死後は存命中より好転するものと信じて満足した。この書状をある貴族気付にして封じ、その人が王に手渡すという金のかからぬ最後の頼みを必ず果たしてくれると信頼した。

父は負債を遺して逝き、わずかな地所はたちまち債権者たちに押さえられた。文無しで、二人の遺児をかかえた母は、毎週毎週、さらに毎月毎月、首を長くして返事を待ち焦がれたが、なしのつぶてであった。彼女は父親の家から離れた経験がなく、思いおよぶかぎりの豪華壮麗といえば、せいぜい荘園領主の館なのだ。父の存命中は、王侯貴族の名前にも親しんでいたが、もとより個人的体験を伴わないので、父亡きあとは、実体も現実味もない、おぼろで、夢のようなものとなってしまった。もし、万一、夫の口に上った貴人たちにすぎる勇気を持ち合わせていたとしても、夫自身の懇願が失敗に終わったことを考えると、そんな思いを一掃したであろう。したがって、惨窮から逃れるすべもなく、尽きぬ心労にいまだに熱い敬慕の念をもって想う最愛の人を失った悲嘆が加わり、激しい労働と生来の虚弱質のせいで、とうとう彼女は貧困と悲惨の連続だった悲しい生涯に終止符を打った。

遺された二人の孤児の状態は野良犬同然だった。母方の祖父も他所からの移住者で、とうに死んでいて、引き取ってくれる親戚はただの一人もなく、よそ者、乞食、寄る辺

ない者であり、わずかばかりを恵んでもらい、小百姓の子扱いされ、筆舌に尽くしがたい貧賤ぶりだった。母の死によって手近な地元の人々のお情けに、ありがた迷惑な遺産として遺されたのであった。

年長のわたしは母が死んだとき五歳だった。両親の談話や、いつの日かわたしに役立つこともあろうかと父の友人たちについて母が語ってくれた情報の記憶が、朦朧とした夢のように、わたしの脳裏に漂っていた。わたしの保護者や仲間たちとは違い、自分は彼らより偉いんだ、と思っていたが、程度も理由も分からなかった。王や貴族と聞くと連想する不当感にはわたしにまつわりついていたが、そのような感情から、行動の手引きとなるような結論を引き出すことはできなかった。わたしの最初の自己認識はカンバーランドの谷や荒野を駆ける無防備な孤児であった。ある農夫に雇われていて、杖を手に、犬を脇に連れて、近くの高地地方で、夥しい群の羊を飼った。そのような生活はあまり自慢できるものではないし、喜びより苦勞がはるかに多いものであった。自由はあり、自然との交流はあり、何をしてもよい孤独があった。しかし、こういったものはロマンティックではあったが、若者特有の、活動への愛、人との共感への欲求を満たしてはくれなかった。羊の世話も四季の変化もわたしのはやる心をなだめることはできなかった。戸外で過ごす暇の多い生活のせいで、わたしは早くから無法者の生き方を身につけた。同じように寄る辺ない子供たちを集めてグループを形成し、その大将となった。羊飼いの少年たちは寄ってたかって、羊たちが牧草地に散らばっている間、いたずらや悪さを企んでは実行したので、農夫たちは腹を立てて仕返しをしてきた。仲間たちのリーダーであり保護者であるわたしは一際目立っていて、どの悪事の補償も負わされた。しかし、罰も苦痛も英雄きどりで仲間のために我慢するかぎり、彼らの賛美と服従を報いとして勝ち取ることができた。

そんな学校で鍛えられたわたしの性質は粗野ではあったが、堅固になった。称賛への欲求と父から受け継ぎ逆境で育んだわずかの自制心によって、わたしは勇敢かつ無謀であった。風水地火の自然力のように荒々しく、飼っている動物のように無教養だった。自分をよく羊にひき比べ、彼らに優る理由は力のみと分かると、この世の権勢家に自分が劣るのは力においてだけだと納得した。こうして高雅な哲学を学ばず、本来の社会的地位からの落魄を絶えずかこち、まるで狼育ちの古代ローマ建国者のような野蛮人と変わらず、文明国イングランドの山々を放浪した。わたしが奉じる法はただ一つで、それは強者の法であった。最高の徳行とは断じて屈従しないことであった。

だが、自分に下した判決を少し取り下げさせてもらおう。死の床の母は、適切と言うにはほど遠い、もうわたしの記憶には薄い教訓を垂れた後で、厳かな忠告をもって、もう一人の子供を兄の庇護にゆだねた。わたしはこの義務だけは力のかぎりを尽くし、本性に備わるかぎりの熱情と愛情を込めて果たした。三歳年下の妹を幼児期からこの手で

育て上げたのだ。男女の差からそれぞれ異なった仕事に従事するうち、二人の間には大きな隔たりができたものの、彼女は常にわたしの愛の大切な対象であった。孤児という語の最大限の見本のようなわれわれは貧困階級の中でも最も貧しく、顧みられない者の中でも特に軽蔑されていた。わたしが持ち前の大胆不敵さで反感のこもった尊敬を獲得していたとすれば、若い娘である彼女は弱い方の性というだけで、優しい愛情を引き起こすたちではないので、数知れぬ屈辱に苛まれていた。彼女の性質も卑しい身分から生じる不運を減じるようにはできていなかった。

妹は並はずれた人で、わたし同様に父特有の性質を多分に受け継いでいた。顔は表情豊かで、目は黒くはないが深く見通せない。その知的な眼差しには無限の空間が見出され、その視界の中では魂が宇宙の思想を理解しているという感じがあった。青白い肌に金髪碧眼で、金色の髪がこめかみにふさふさと垂れ、豪華な色がその下の生ける大理石とよい対照をなしていた。粗末な野良着は彼女の顔の優雅な表情と明らかに不釣り合いなのに、奇妙に調和していた。彼女はグイド⁴⁾の描く聖女のように心と面輪に天国を秘めているので、見る者はその内面にあるものだけを見て、衣装も容貌さえも目に入らないほどであった。

だが、美しく、高貴な情操を豊かに恵まれながら、わがパーディタ⁵⁾(この奇抜な名前は今はの際の父から妹への贈り物なのだ)の性質は完全に聖女というわけではなかった。彼女の態度は冷淡でよそよそしかった。愛情と慈しみに満ちた人々に育てられていたら、こうはならなかったに違いない。愛されず顧みられなかったので、不親切には不信と無言で応酬した。権威を振るう人たちには従順だったが、いつも眉根を寄せていた。近く者は皆敵意を持つと決め込んでいるようで、同じ感情に基づく反応を示すのだった。自由になる時間はすべて独りで過ごした。滅多に人の行かない所を散策したり、危険な丘によじ登ったりしては、人気のない場所で孤独に身を包むのである。森の小道を行ったり来たりして全時間を使い果たすことも多かった。花と蔦で花輪を編んだり、ゆらゆら揺れる影や木の葉のきらめきに注意を向けたりしていた。時には小川のほとりに座り込んで、考えが途切れると、花や小石を水中に投げ込み、花が漂い小石が沈むのをじっと見つめていることもあった。あるいは木の皮や葉っぱで作った舟に羽毛の帆をつけて水に浮かべ、小川の早瀬や浅瀬の間を航行するのを熱心に目で追うのだった。その間彼女の活発な空想は無数に組み合わせられ、「河川や野原で起きる出来事」を夢見た。——自ら創造したこの周遊にうっとり和我を忘れ、単調な日常生活の務めに戻るときはいかにも不承不承だった。

貧乏が雲のように妹の美点を覆い隠していた。心を潤す露のような愛情を与えてくれる者がなかったため、彼女の長所はまさに消滅寸前であった。両親の思い出もわたしほとんど残っていなかった。唯一の味方として、兄にぴったりより添っていたが、その結束

最後の人

は保護者たちの嫌悪感を煽った。どんな過ちも誇張されて犯罪となった。もし生得の繊細な心と人柄が適応し易い階層に生まれていたら、彼女はきっと賛美的となっていたであろう。彼女の美德は欠点と同じく人目に立つものだったから。父の血を高めた非凡な特性が彼女に現れていた。彼女の血管を流れるのは雅量の血潮だった。狡い手管、羨望、卑劣は彼女の本性の対蹠点にあった。愛想よくはれやかな顔つきのときはさながら諸国民の女王の風格があった。目はいきいきと輝き、表情は大胆不敵だった。

情況と性質によって、われわれは等しく通常の社会的交流から断たれていたが、非常に対照的であった。わたしには交友と喝采という刺激が必要不可決だったが、パーディタは自分だけで充足していた。無法者の習性がありながら社交的な性質のわたしに対して、彼女は世捨て人同然だった。わたしは触知できる現実の中で、彼女は夢の中で生きていた。わたしは敵でさえ好きだったと言える。彼らの刺激はある種の幸福をもたらしてくれたから。パーディタは友人でさえ嫌った。自分の夢見心地を邪魔するからだ。歓喜と勝利の気持も、共有する者がなければ、わたしには苦汁と化すが、パーディタはうれしいときも孤独に逃げ込み、自分の感情を表すことも他人の共感を求めることもなく、毎日を送ることができた。それどころか、優しく友達の顔を見つめたり声に耳を傾けながら、冷やっとするほどよそよそしい態度を取ることができた。感覚も彼女にとっては感情となり、外界から得た知覚も内面に育つ直観と調整してからでなければ口にしなかった。彼女はいわば空気と天の露とを吸収し、それを果実と花という美しい姿にして再び日光の中に放つ豊饒な土のようであった。同時に、熊手で掘り返され、目に見えない種子を新たに蒔かれた土壌のように、暗くごつごつしていることが多かった。

彼女の住む家の手入れの行き届いた芝地は、アルスウォーター湖の水際へなだらかに続いていた。背後の山にはブナの森が広がり、頂上から静かに落ちてくる清流がポプラ木陰の土手沿いに湖へ流れ込んでいた。わたしが住み込んでいた農夫の家は山間の高い所に建っていた。後ろにそびえる暗い崖は北向きのため、夏中岩の裂け目に雪をたたえていた。夜明け前に私は羊たちを牧羊場に連れて行き、一日中番をした。寒い雨天が多く晴天はまれなので、骨の折れるつらい生活であった。しかし、自然力などものともしないのがわたしの誇りだった。忠実な犬は、わたしが持場を離れて仲間と悪いたくらみを実行に移している間、ちゃんと群れの番をしてくれた。正午にまた集合し、農夫の食物を軽蔑の眼で投げ捨て、炉を作り、火を焚き、近隣の禁猟区から盗んだ獲物を料理した。それから、ジプシーのように鍋を囲んで、危機一髪の脱走とか犬との格闘とか待伏せとか逃走とかの話に花を咲かせるのだった。迷子の子羊の搜索や罰を逃れる算段で午後の時間を費やした。夕暮れがくると、羊の群れは檻に、わたしは妹のもとに帰った。

古風な言い方をすれば、無罪放免で済むことはめったになかった。われわれの御馳走は打擲や投獄と引き換えだった。一度、十三歳のとき、地方の監獄に一カ月間送られた

ことがあった。出獄したとき、わたしの道徳観は全く改善されず、圧政者への憎悪は十倍に膨らんでいた。パンと水だけの食事は私の血を鎮めず、独房での監禁も思想を穏健にはしなかった。わたしは怒り、いらいらし、惨めだった。幸せな時間といえば復讐のたくらみを練るときだけだった。強いられた孤独の中で、そのたくらみを完璧に練ったので、九月の初旬に自由の身になって以後、次のシーズン中ずっと、自分と仲間のために有り余るほどの見事な食物を一度の失敗もなく手に入れたものだ。すばらしい冬だった。厳しい霜と烈しい雪のため動物たちは弱まり、地方の郷土たちは炉端から離れなかった。われわれは食べ切れないほどの獲物を手に入れ、わが忠犬もお余りを頂いてつやつやしていた。

こうして歳月は過ぎ去った。歳月によって加わったものといえば自由へのいや増す愛と、野蛮で奔放でないもの、つまり同類でないものへの軽蔑だった。十六歳で、早熟なわたしの外貌は成人の域に達していた。長身で逞しく、常時力仕事に従事し、厳しい悪天候に慣れていて、日焼けした肌は赤銅色で、腕力を意識した足取りは堅固で揺るぎなかった。恐れる者もなければ、愛する者もなかった。晩年、この時期の自分を振り返って驚いたものだ。もしそのまま無法者の生き方を続けていたら、完全に人間の屑となっていたであろう。わたしの生活は野獣のようであり、わたしの精神は獣性へと墮落していく危険に瀕していた。そのときまではまだ、その野蛮な生き方からわたしの本性が根源的な弊害を被るほどではなかった。むしろそのお蔭でわたしの体力はますます向上し、精神力も同じ鍛練を受けて勇猛果敢だった。だがその頃、自慢の自立心に日々唆されて、暴君のようにふるまっていた。自由は放蕩無頼と化した。もう成人に達するばかりのわたしの内には、力強い情熱が森の樹木のように深く根を下ろし、異常なはびこり方で、わたしの人生の小道に有害な影を落としかけていた。

幼稚な手柄の域を超えた冒険心に燃え、将来の活動について穏かでない夢に耽った。昔の仲間を避けているうちに皆いなくなった。彼らは生まれついた境遇での生業の仕上げに世に出される年齢に達したのだ。ところが、社会の除け者の身には指導者も推薦者も皆無でわたしはぐずぐず留まっていた。老人たちはいい見せしめと指さし、若者たちは怪しんで差別した。わたしは彼らを憎み、ついで自分自身を憎み始めることになった。これこそ最悪の最終的墮落である。凶暴な行動で紛らしていたが、実はその習性を半ば軽蔑していた。文明に抗って悪戦苦闘を続けながら、文明に受け入れられたいと切望していた。

父の昔の生活について母が話していたことを、記憶を頼りに何度も何度も思い出してみた。父のわずかばかりの遺品をじっと見ると、山あいの農家では容易に見られない優雅な品々であると分かった。だが、そのどれ一つとしてわたしに快適な別の生活を展いてくれる手掛かりとはならなかった。父は貴族たちと交友関係があったそうだが、わた

最後の人

しの知っているのはその後の絶縁だけなのだ。王という名も——死の床の父が最後の嘆願を申し入れたのに、残忍にも無視した人——不親切と不正、それに伴う恨みなどを連想させるだけであった。現実の自分より偉大な者に生まれついたはずだから、偉大になってやる。だが、わたしの歪んだ認識では、偉大さは必ずしも善と結びついておらず、大物願望の夢の中でわたしの放縦な考えが暴れ狂うとき、道徳的斟酌に手綱を取られることはなかった。こうして、下には悪の海がのたうつ塔の先端に立ち、真逆さまにその中に飛び込み、あらゆる障害を越えて求める対象に奔流のごとく突進しようとしていた——まさにそのとき、ある不思議な力がわたしの運命の河に働きかけて、その激流を牧場をうねるせせらぎに変えてしまった。

第二章

慌ただしい人の世から遠く離れて山あいの人に住む身には、戦争や政権の変化のうわさはただのかすれ声となって伝わって来るだけだ。イングランドはわたしの少年期の間中、激動の場であった。2073年に、父の昔日の友が最後の国王として、臣下の抗議に従って穏便に退位し、共和制が敷かれた。退位した国王と家族には広大な地所が確保され、ウィンザー伯の称号が与えられた。そして古い王城であるウィンザー城がその広い領地ぐるみ、彼にあてがわれた財産の一部であった。ほどなく彼は息子と娘を一人ずつ遺して世を去った。

オーストリア王家の姫であった元王妃が夫に時流の要求に抵抗させていたのだ。傲慢不遜で、権力を愛し、王国を奪われた夫をひどく軽蔑した。彼女は王位剥奪後も、子供たちのために、イギリス共和国の一員として留まることを承諾した。寡婦となるや、第二代ウィンザー伯である息子エイドリアンの教育に全心全霊を傾けて、自らの野心を遂げようとした。その母の乳を吸って、エイドリアンは失った王冠の奪還という不動の目的に向かって育てられていた。彼は十五歳だった。勉学に耽り、年齢以上の学問を修め、天賦の才に恵まれていた。うわさでは、彼はすでに母親の野望を挫き、共和国思想に興味を持ち始めていたという。それはそれとして、傲慢な伯爵夫人は家庭教育の機密は誰にも明かさなかった。エイドリアンは孤独のうちに育てられ、同じ階級の中で自然にできる同い年の友達から隔離されていた。ある人知れぬ事情から、母親は手元で教育するのを止めざるをえなくなり、彼がカンバーランドを訪れるといううわさが流れた。ウィンザー伯夫人のやり方に関してさまざまな風説が飛び交ったが、恐らくどれも真実ではなかろう。しかし、日を追って、イングランド最後の王家の貴い若殿をわれわれのうちに迎えることは揺るぎない事実であった。

アルスウォーターに、伯爵家所領の広大な地所と荘館があり、趣向を凝らした設計の

広い獵園が附属していて、獵の獲物が有り余るほど放ってあった。わたしはこの禁獵区でよく密獵をしていたが、誰かまわぬこの私有地の状態がわたしの略奪に好都合だったのだ。若きウィンザー伯のカンバーランド訪問が決定的となったとき、屋敷と獵園を彼の居住にふさわしくすべく職人たちが到着した。どの部屋も初期の壮麗さを取り戻し、荒れ放題であった獵園も修復されて常ならぬ警備が敷かれた。

この知らせにわたしはひどく動揺した。眠っていた記憶がかき起こされ、保留になっていた屈辱感が目覚め、新たな復讐心が生まれた。もはや仕事に打ち込めず、計画も策略も皆忘れてしまった。新しい生活が始まる予感がし、それも幸先の悪いものであった。綱引きが始まろうとしていると思った。父が傷心を抱いて逃げて来た地域に、若い伯爵が意気揚々と乗り込んで来る。父王が信頼に報わなかったため、預けられた不運な子供たちが悲惨な乞食となっているのが分かる。彼がわれわれの存在を知ると、父王が遠くで取ったのと同じ傲岸な態度で、身近なわれわれを扱うに違いない。過去の事実の再現である。いずれこうして、その爵位を持つ若者——父の友人の息子、と出会うことになるのだ。彼は家来たちにかしずかれています、貴族やその息子たちと交わっていた。イングランド中に彼の名は鳴り響いていた。彼の到来は雷雨のようにはるか彼方から聞こえてきた。それにひきかえ、無学無教養のわたしは彼と出会うことにでもなれば、こんな零落の憂き目に合わせた彼の父の友情にもとる行為について、廷臣たちを前に証明してみせなければならないのだ。

こういった諸々の考えにすっかり心を占められて、わたしはまるで魅入られたように伯爵邸に足繁く通った。改修の行程を観察し、積み荷を下ろす荷馬車のそばに立って、ロンドンから持ってこられたさまざまな贅沢品が取り出され、館の中に運び込まれるのを見ていた。元王妃の差し金で、彼女の息子は王侯にふさわしい絢爛豪華な品で囲まれることになったのだ。極上のカーペットや絹のタペストリー、黄金の装飾品、華美な浮き彫り模様の施された金属製品、紋章飾り付きの家具、高級な附属品などが目に入った。つまり、華麗さにおいて王にふさわしいものだけが王の直系の青年の目に留まる仕掛けなのだ。これらの品々を見てから、わたし自身の卑しい衣服に目を移した。どこからこの差が生じるのか？ ほかでもない、王子の父の犯した忘恩から、裏切りから、無責任からではないか。彼の父は気高い同情や寛大な思いやりを一切合財放棄したのだ。驕慢な母の血を受け継いでいる青年、王国の富と高位を一身に集めているこの青年も、わたしの父の名に侮蔑を抱き、わたしの正当な権利を嘲笑するよう教育されていることに無論疑いの余地はない。この目を奪う威風は汚辱に過ぎず、金欄織りの彼の旗を色あせてぼろぼろのわたしの旗の側に立てることは、彼の優位ではなく品位の卑しさを公言するに等しいと自分に言い聞かせた。それでも、彼が羨ましかった。美しい馬の群、贅沢な細工の鎧兜、彼に向けられる賛美、崇拝、侍る従者、高位、尊敬——どれも皆わたしか

最後の人

ら力づくでもぎ取られたものに思え、羨望に苦痛が新たに加わり耐え難かった。

精神的な苦悩に追い打ちをかけたのは、パーディタが、あの夢想家のパーディタが、うっとりとして夢から覚めたように、ウィンザー伯がいよいよご到着よ、とわたしに告げたときだった。

「うれしいのか？」むっとして言うと、

「もちろんだわ、ライオネル」と彼女は答えた。「ぜひ彼に会いたいわ。王家の末裔だし、この地で初めての高貴な人だし。皆あこがれて慕ってるわ。それに、身分の高さなんて物の数ではないほど、寛大で、勇敢で、臣下の者にも目をかける、すばらしい人だそうよ。」

「結構な教えを受けて来たもんだよ、パーディタ。そっくりそのまま鵜呑みにして、伯爵の美德とやらの本当の値打ちを忘れてる。彼の寛大さはぼくらの何不自由ない暮らしを見れば分かるし、勇敢さはぼくらへの庇護で、臣下に目をかけるというのはぼくらを引き立ててくれたことで分かるうってまんだ。身分の高さは物の数じゃないって？彼の美点はどれもこれも高い身分からくるものばかりじゃないか。金持だから寛大と言われ、有力だから勇敢で、大勢に仕えられているから目下にもやさしいのさ。皆にそう言わせておけ、イングランド中にそう信じさせておけ、ぼくらは知ってるんだ——あいつは敵だ——けちで、卑劣で、傲慢きわまる敵だ。もしあいつにおまえの言う美点のかけらでもあったら、ぼくらを正当に扱うはずだ、たとえ打撃を与えねばならなくても、墮落した敵ではないことを見せるはずだ。あいつの父親はおれの父親をひどい目に合わせた——あいつの父親は、安全な玉座の上から、親父を侮辱しやがった。親父は恩知らずの王に恥を忍んで、必要以上に身を落として頼んだのに。二人の父親のそれぞれの子供であるあいつとおれも敵同士なんだ。あいつに、おれがどんなに苦しんでいるか分からせ、おれの復讐の恐ろしさを思い知らせてやる！」

数日後、青年伯爵が到着した。

注

- 1) メアリ・シェリー (Mary Shelley, 1797-1851) の小説 The Last Man (1826)。最初の人間アダムに対する人類最後の人間の意で名付けられた。舞台は二十一世紀の終わり近くである。王室が2073年に廃され、イギリスが共和国となるころから始まっている。『フランケンシュタイン』(Frankenstein, 1818) 同様奔放な想像力を駆使した小説であるが、250年も先の世界の子想にはさすがに政治的、科学的、国際的限界があるのは無理もない。夫パーシィ・ビッシュ・シェリー (P. B. Shelley)、友人バイロン卿 (Lord Byron) と始めた ghost story をメアリが『フランケンシュタイン』に完成させたのに対し、『最後の人』執筆時には夫パーシィもバイロンもすでに世になく、登場人物のエイドリアンとレイモンド卿はその二人のポートレートであり、メアリの追悼と哀惜の情が込められている。

最後の人

- 2) クマエの町の、予言力が有名な女予言者。ギリシア語で書かれた神託集『シビラの書』(Sibylline Books)九巻のうち、六巻を焼却し、三巻をローマ王タルクィヌス(Tarquin the Proud, 534-510 B.C.)に売る。クマエはイタリア南西部カンパニア海岸の古都。イタリアで最古期のギリシア植民地。
- 3) ペトラルカのソネット322からであるが、記憶違いがある。
- 4) グイド・レニ (Guido Reni, 1575-1642) 画家。メアリ・シェリーはその絵をローマで見た感想を夫やバイロンと共通の友人リー・ハント (Leigh Hunt, 1784-1859) に書き送っている。
- 5) 「失われた女」の意。シェイクスピア晩年のロマンス劇『冬物語』(*The Winter's Tale*, 1610-11) のヒロインの名前。シチリア王の娘に生まれながら、羊飼いの娘として育てられ、後ボヘミア王子と結ばれる。